



Title	心態詞dochの機能について
Author(s)	塩谷, 幸子
Citation	独語独文学科研究年報, 20, 233-247
Issue Date	1993-12
Doc URL	<a href="https://hdl.handle.net/2115/25962">https://hdl.handle.net/2115/25962</a>
Type	departmental bulletin paper
File Information	20_P233-247.pdf



# 心態詞 doch の機能について

塩谷幸子

## 0. 序

この論文では、心態詞 (Abtönungspartikel<sup>1)</sup>) の doch を取り上げ、その機能の分析を試みる。通常心態詞はいくつかの意味的なメルクマールを立ててその用法を説明したり、あるいは様々な用法を統一的な意味でまとめる試みがなされる。これから、心態詞にはどのような特性があるのか、心態詞の意味・用法はどのように記述されるのが良いのか、という考察を通じて、心態詞とドイツ語の文型との関係を明らかにして行く。

## 1. doch の同音異義語

心態詞は、同音異義語、すなわち同じ語形でありながら異なる品詞の語を持っている場合が多く、doch も例外ではない。doch は、心態詞だけでなく、接続詞・副詞・答えの不変化詞 (Antwortpartikel) として用いられる。これらの同音異義語はそれぞれアクセントの有無や、機能、用いられる文型によって区別される。例えば、以下のように分類されている<sup>2)</sup>。

- (1)# Franck 1980
- DOCH<sub>s</sub> : Antwortpartikel (Satzkürzel)
  - DOCH<sub>z</sub> : Zustimmungspartikel/ minimal response
  - DOCH<sub>A</sub> : Adverb
  - DOCH<sub>K</sub> : Konjunktion
  - DOCH<sub>MP</sub> : Modalpartikel
    - Standard-Fall
    - Erinnerndes doch
    - Indirekte Fragen-doch
    - Emphatisches doch
    - Aufforderungs-doch
    - Monologisches doch

# Weydt/Hentschel 1983 (a) Homonyme

-Antwortpartikel

-Konjunkionaladverb

(b) Abtönungspartikel

-unbetont -Imperativsätze

-Selbständige Konditionalsätze

-in Kombination mit anderen Partikeln

-betont -Entscheidungsfragen

-Assertionssätze

# Hentschel 1986 -Betontes doch

-Doch als Satzäquivalent

-Doch als Konjunktion

-Doch als Adverb

-Unbetontes doch

-Doch als Assertion

-Doch in Intonationsfragen

-Doch in Bestimmungsfragen

-Doch in selbständigen Konditional- und daß-Sätzen

# Helbig 1990 -Abtönungspartikel doch<sub>1</sub> - doch<sub>7</sub>

-Antwortpartikel doch<sub>8</sub>

これらを参照して doch の分類を行うが、心態詞の doch の特徴を明らかにするために、まず心態詞以外の doch の用例について簡単に触れておく。

### 1.1.1 接続詞の doch

(2) Ich habe ihn mehrmals angerufen, *doch* er war nicht zu Hause.

この doch は、aber と同じように、比較・対照を表わす等位接続詞である。アクセントを付けて発音される。

## 1.2. 副詞の doch

(3) Die Erde bewegt sich doch.

一見、心態詞の doch と紛らわしい場合があるが、この doch は、心態詞とは異なりアクセントを付けて発音される。dennoch、trotzdem の意。また、決定疑問文には用いることができるが、補足疑問文には用いられない。この点も、心態詞の doch とは異なる。

(4) a. \* Wo ist Eva *dóch* gewesen? (副詞の doch)

b. Wo ist Eva *doch* gewesen? (心態詞の doch)

## 1.3. 答えの不変化詞の doch

答えの不変化詞 (Antwortpartikel) の doch は、先行する発話に対して答える際に用いられるものであり、文から離れて単独で用いられる。アクセントを付けて発音される。この doch は、3種類に分類される。

### 1.3.1. 典型的な例

(5) A: Ist Erika gestern nicht gekommen?

B: *Doch* (, sie ist gestern gekommen).

否定詞の入った決定疑問文に対して、肯定の文で答える場合、doch が用いられる。肯定の決定疑問文に対し肯定の答えをする際には ja、否定の決定疑問文に対し否定の答えをする際には nein が用いられる。

(5)' A: Ist Erika gestern gekommen?

B: Ja (, sie ist gestern gekommen).

(5)'' A: Ist Erika gestern nicht gekommen?

B: Nein (, sie ist nicht gestern gekommen).

### 1.3.2. 否定詞を含む叙述文に対して

(6) A: Du hast mir noch keine Antwort gegeben.

B: *Doch*.

決定疑問文の答えではなく、先行する叙述文に対する答えとして用いられる場合。先行する文は、否定の語を含んでいる。

### 1.3.3. 相手のコメントに対して

次のような場合。

(7) A : Das ist ein echter Chagall !

B : Das bestreite ich !

A : *Doch* ! Ich weiß es aus erster Hand. (Franck 1980)

これは、明らかな否定に対して答えているのではなく、先行する文に異論を唱えている。あるいは、相手の異議に対する答えとして、*doch* が用いられる。

## 2. 心懸詞の *doch*

心懸詞は不変化詞 (Partikel) の一種である。不変化詞には、心懸詞の他に答えの不変化詞などが含まれ、また広い意味では、接続詞・副詞なども含まれるが、心懸詞はそれらとは区別されるものである。心懸詞は文成分にはならず、従って、疑問文に対する答えとして独立して用いられることはない。また、文頭には出ず、普通文の中 (定動詞の後) に置かれる。心懸詞を打ち消すことはできない。心懸詞は特別な意味的なものは表現しないが、コミュニケーション上のレベルで何らかの機能を持つものである<sup>3)</sup>。

これから心懸詞の *doch* を、現われる文型とその用法によって 8 種類に分類する。心懸詞の *doch* は、叙述文、イントネーションによる疑問文、補足疑問文、命令文、感嘆文、願望文の中に現われる。なお、この *doch* には、アクセントが付かない。

- (8) DOCH als Abtönungspartikel
- Zurückweisendes DOCH<sub>1</sub>
  - Erinnerndes DOCH<sub>2</sub>
  - DOCH<sub>3</sub> in Intonationsfragen
  - DOCH<sub>4</sub> in Ergänzungsfragen
  - DOCH<sub>5</sub> in Imperativsätzen
  - Höflichkeitsvariante: DOCH<sub>6</sub>
  - DOCH<sub>7</sub> in Ausrufesätzen
  - DOCH<sub>8</sub> in Wunschsätzen

## 2.1. 叙述文の doch

叙述文に見られる doch には、2 種類の用法がある。

### 2.1.1. 聞き手の前提を訂正する (Zurückweisendes) DOCH<sub>1</sub>

(9) A : Mach das Fenster zu !

B : Es ist *doch* viel zu warm im Zimmer. (Helbig 1990)

doch を用いることにより聞き手の誤った前提を退ける。この場合、A は「部屋は暖かくない」と思っているが、B は「部屋は暖かい」と思っているのです、それを訂正する。

### 2.1.2. 思い起こさせる (Erinnerndes) DOCH<sub>2</sub>

(10) Wir wollten *doch* heute abend ausgehen.

ある事柄を、聞き手は知っているはずだが、この時点で思い出していない、思い出していないように見える、という場合に doch が用いられる。

## 2.2. 疑問文の doch

### 2.2.1. イントネーションによる疑問文の DOCH<sub>3</sub>

(11) a . Das schaffst du *doch* bis morgen ?

b . \* Schaffst du das *doch* bis morgen ? (Helbig 1990)

この文は、疑問文の機能を持っているが、定動詞は 2 番目に置かれる。話し手は、聞き手の ja という返事を想定しているものの、疑問がある。この doch は、決定疑問文には用いることはできない。決定疑問文に現われるのは、副詞の doch である。

(11) a . Das schaffst du *dóch* bis morgen ? (副詞の doch)

b . Schaffst du das *dóch* bis morgen ? (副詞の doch)

### 2.2.2. 補足疑問文の DOCH<sub>4</sub>

(12) Wo arbeitest du *doch* ? (Helbig 1990)

この doch は、本来知っているべき事柄が、話し手にはこの時点で思い浮かばない、という場合に用いられるものである。機能は DOCH<sub>2</sub> と共通している。

## 2.3. 命令文の *doch*

### 2.3.1. 命令文の DOCH<sub>5</sub>

(13) Setzen Sie sich *doch* !

要求する発語内的力を強めるもの。sollen を用いた文でも同じ機能を持つ。

(14) Du sollst *doch* Hochdeutsch sprechen !

### 2.3.2. 敬意表現の DOCH<sub>6</sub>

(15) Nehmen Sie *doch* Platz ! (Franck 1980)

例えばAが、Aの家で、Bに言った場合、相手に席を勧める丁寧な言い方となる。この文は、命令形と同じ形をしているが、発話された状況で命令文と区別される<sup>4)</sup>。

## 2.4. 感嘆文の DOCH<sub>7</sub>

(16) Wie klug er *doch* ist !

(17) Du bist *doch* kein kleines Kind mehr ! (Helbig 1990)

話し手の期待と発話された状況は異なっていて、話し手は認識を新たにする、という場合に *doch* が感嘆文の中で用いられる。

## 2.5. 願望文の DOCH<sub>8</sub>

(18) Wenn er *doch* bald käme !

この *doch* は義務的に用いられなければならない。また、*nur* や *bloß* で置き換えられることもできる。

(18) a . Wenn er *nur* bald käme !

b . Wenn er *bloß* bald käme !

### 3. 心置詞 *doch* の統一的意义

前章で心置詞 *doch* の用法を8通り挙げた。しかし、果たして *doch* の持つ意义なり機能なりが8通りあるのだろうか。ここでは、*doch* の機能に注目して、統一的意义を探る方向で、心置詞 *doch* の分類を再検討する。

#### 3.1. 義務的用法の DOCH

統一的意义を求める前に、2. に挙げた DOCH<sub>1</sub>から DOCH<sub>8</sub>を詳しく見てみると、その中に性質の違う *doch* がある。すなわち、願望文の DOCH<sub>8</sub>は明らかに異質である。この DOCH<sub>8</sub>は、義務的に用いられなければならない<sup>5)</sup>。

- (18) a. Wenn er *doch* bald käme!  
b. Käme er *doch* bald!

ここでは *doch* は、*wenn* や接続法II式と同じく願望文にとって不可欠な要素である。この *doch* がなければ、願望文にはならず、条件文の前半としてのみ解釈される。

願望文のほか、認容文にも義務的に *doch* が用いられている例がある<sup>6)</sup>。

- (19) a. Wo du *doch* nur ein dünnes Hemd an hast.  
b. Hast du *doch* nur ein dünnes Hemd an. (Oppenrieder 1989)

場所を表わすものではない *wo* と *doch* が一緒に認容文を作る。 *wo* を取って、動詞を文頭に置くこともできる。

これらの *doch* は、心置詞と接続詞など他の要素が組み合わさってイディオム的な意味を形成するもので、任意に用いられる心置詞とは性質が異なるものである。従って、DOCH<sub>8</sub>と、他の DOCH<sub>1</sub>から DOCH<sub>7</sub>までとは分けて考えるべきである。

#### 3.2. 心置詞 DOCH<sub>1</sub>~DOCH<sub>7</sub>の統一的意义

##### 3.2.1. *doch* の基本的な意义, „nicht-übereinstimmbar“

2. で挙げた例から明らかなように、DOCH<sub>1</sub>から DOCH<sub>7</sub>の内で、似たような働きをしているものが見られる。例えば、思い起こさせる (Erinnerndes) DOCH<sub>2</sub>と、補足疑問文の DOCH<sub>4</sub>は、聞き手・話し手の立場の違いはあるが、本来知っているべきことをこの時点で失念して

いる、ということは共通している。

(10) Wir wollten *doch* heute abend ausgehen.

(12) Wo arbeitest du *doch*?

この2つは現われる文型は異なるが、機能は同じである。

また、命令文の DOCH<sub>5</sub>と、敬意表現の DOCH<sub>6</sub>についても、DOCH<sub>5</sub>は命令の力を強め、DOCH<sub>6</sub>は命令の力を弱めているとも言えるが、DOCH<sub>5</sub>も DOCH<sub>6</sub>も、相手に自分の意見に従ってもらおうとする働きを強めているとも考えられる。

(13) Setzen Sie sich *doch* !

(14) Du sollst *doch* Hochdeutsch sprechen !

(15) Nehmen Sie *doch* Platz !

つまり、一見逆の作用があるように見えるが、文の持つ発語内的力を促進させるという点では同じ働きである。他の DOCH の用例についても、用法は様々に分類できるものの、それぞれに共通する性質を見出すことができそうである。

そこで、DOCH<sub>1</sub>から DOCH<sub>7</sub>までに共通する基本的な機能を設定する。

(20) 心態詞 *doch* は、話し手あるいは聞き手にとって、当然そうであると想定されるべき命題と、目の当たりにされる事実との「ずれ」を表わす。(„nicht-übereinstimmbar“)

DOCH<sub>1</sub>から DOCH<sub>7</sub>を再検討してみると、DOCH<sub>1</sub>は、話し手と聞き手の前提が違う(ので訂正する)というもの、DOCH<sub>2</sub>と DOCH<sub>4</sub>は、本来知っているべきことを思い出せないというもの、DOCH<sub>3</sub>は、そうあるべき事柄について、わずかに疑問がある(ので取り除く)もの、DOCH<sub>5</sub>と DOCH<sub>6</sub>は、聞き手の考えとは違うかも知れないが、それでも話し手の意思に従ってもらおうというもの、DOCH<sub>7</sub>は、話し手の予想とは異なっている、というように、それぞれ何かしらの「ずれ」が見出だせる。

- (21) nicht-übereinstimmbar
- DOCH<sub>1</sub> DOCH<sub>2</sub> in Aussagesätzen
  - DOCH<sub>3</sub> DOCH<sub>4</sub> in Fragesätzen
  - DOCH<sub>5</sub> DOCH<sub>6</sub> in Aufforderungssätzen
  - DOCH<sub>7</sub> in Ausrufesätzen

### 3.2.2. doch の補助的な意味 „bekannt“

7通りあった心態詞 *doch* の統一的な意味を求めるためには、ある程度抽象的にその意味を設定しなければならない。すると必然的に、物足りない箇所が出てくる。例えば、聞き手の前提を訂正する (Zurückweisendes) DOCH<sub>1</sub> と思い起こさせる (Erinnerndes) DOCH<sub>2</sub> は、基本的な意味だけでは区別できない。

(9) A : Mach das Fenster zu !

B : Es ist *doch* zu warm im Zimmer.

(10) Wir wollten *doch* heute abend ausgehen.

DOCH<sub>1</sub>の相手に抗議するニュアンスは、DOCH<sub>2</sub>には見られない。DOCH<sub>1</sub>は、主文に多く見られる。一方、DOCH<sub>2</sub>は、本来知っているべきものを忘れていたかも知れない、というもので、従属文にも似たような用法が見られる。そこで、心態詞 *doch* の補助的な意味を設定して、この2つを区別することにする。

(22) 心態詞 *doch* には、既に知っていることに関わる機能を持っているものもある。

(„bekannt“)

DOCH<sub>2</sub>の、本来知っているべきことなのに思い浮かばない、というニュアンスは、全く新しい知識ではないので、「既に知っている」という表現を使うことにする<sup>7)</sup>。もちろん、補足疑問文の DOCH<sub>4</sub>にも当てはまる。

(12) Wo arbeitest du *doch* ?

なお、補助的な意味が用いられる場合でも、先に挙げた基本的機能も同時に含まれている。

(23) bekannt — Erinnerndes DOCH<sub>2</sub>  
— DOCH<sub>4</sub> in Ergänzungsfragen

## 4. 心態詞と文型の関連性

前章で、心態詞 *doch* は、すべての用法に共通する基本的機能「ずれがある」と、特定の用法に見られる「既に知っている」という意味とで表わせることを述べた。さて、これらの性

質は、どのような事実と関連しているのでしょうか。この章では、*doch* の「ずれがある」「既に知っている」という 2 つの性質を手掛かりにして、いくつかの現象を見て行くことにする。

#### 4.1. *doch* に適した文型

2. で見たように、*doch* はすべての文型<sup>8)</sup>に現われる訳ではない。*doch* は、決定疑問文には用いることはできない。

- (11) a. Das schaffst du *doch* bis morgen?  
b. \* Schaffst du das *doch* bis morgen?  
c. Das schaffst *döch* bis morgen? (副詞の *doch*)  
d. Schaffst du das *döch* bis moegen? (副詞の *doch*)  
e. Schaffst du das *denn* bis morgen?  
(12) a. Wo arbeitest du *doch*?  
b. \* Wo arbeitest du *ja*?

心態詞を決定疑問文に用いることができないのではない。*denn* は、決定疑問文に現われる。決定疑問文に現われないのは、*doch* の特徴である。

3. で述べたように、*doch* は、想定される命題とのずれを表わすが、決定疑問文の場合、「ずれ」を生ずべき基準点は定まっていない。この例では、「明日までにやるのかやらないのか」は、未定である。一方、補足疑問文の場合、「どこかで働いていること」は確かである。Wo arbeitest du *doch*? というのは du arbeitest irgendwo を含意している。この点に相違がある。従って、*doch* は、補足疑問文に用いることはできるが、決定疑問文に用いることはできない。他の心態詞と、用いられる文型に差が出てくる。

心態詞ごとの基本的な機能は、心態詞の現われる文型を規定する。例えば、*ja* の基本的な機能は想定される命題との一致 („*übereinstimmer*“)、*denn* は完全な違い („*unterschiedlich*“) を表わしているが、それによって、*ja* は叙述文・命令文・感嘆文に、*denn* は疑問文・感嘆文に用いられる、という分布が生じる。

#### 4.2. 前域の心態詞

通常心態詞は、定動詞の後から不定動詞までの中域に現われるとされる<sup>9)</sup>。しかし、補足疑問文の場合、前域に現われることがある。

- (24) a. Wer *schon* will das?

- b. Wer *denn* will das?
- c. Wer *bloß* will das?
- d. ?? Wer *doch* will das? (Meibauer 1991)

schon、denn、bloß、doch は、補足疑問文に用いることができる。補足疑問文では、心態詞が前域に置かれることがあるが、doch は難しい。schon と doch は affirmativ (肯定的) な性質がある心態詞としてまとめて扱われることもある<sup>10)</sup>が、ここでは違いが見られる。

(24) のような例では、rhetorisch (修辭的) な読みがなされることが多い。denn では、話し手は niemand という答えを期待している。すなわち、「誰もやらないのだろう」と思っている。schon では、niemand の他、特定の人を指していることもある。つまり、「Hans に決まっているでしょう」などという場合もある。bloß は、否定、特定の人を指す読みの他、純粹に情報を求める疑問文としての解釈もできる<sup>11)</sup>。

ところで、補足疑問文の DOCH<sub>4</sub> は、本来知っている筈なのに失念している、という用例があった。つまり、基本的機能の「ずれがある」と補助的な意味の「既に知っている」の両方が揃っている場合に限定されている。

ここで、補足疑問文の denn について検討して見よう。

- (24) a. Wer will *denn* das?
- b. Wer *denn* will das?

補足疑問文の denn には 2 通りある。この場合、話し手が誰もやらないのだろう、と思っ  
ているものと、聞き手は知っていたかも知れないけれども話し手は知らなかった、というニュ  
アンスを表わすものがある。前域に denn が置かれているものは、前者の用法である。denn  
の基本的な機能は「相違がある」こと、補助的な意味としては「予期していない („unerwartet“<sup>12)</sup>)」  
というのが考えられるが、基本的機能の用法の場合に前域に置かれることができる。

つまり、schon、denn、bloß はそれぞれの基本的機能のみで補足疑問文に用いることが  
できるが、doch ではそれができない。すなわち、基本的な機能で用いられている際に、前域に  
現われることがある。doch は、schon、denn、bloß と比べ、補足疑問文での振る舞いが不自由  
である。補足疑問文とあまりよく反応していない。従って、文型と呼応しているのは、補助  
的な意味ではなく、心態詞の基本的な機能である。

#### 4.3. 従属文の doch — 関係文の場合

従属文の場合は、独立した文型として扱われないため、心態詞 doch の「既に知っている」

という性質が前面に出る。

- (25) a . Diese großen Autos, die *doch* mehr als 20 Liter Benzin verbrauchen, sind unpraktisch.  
b . \* Autos, die *doch* mehr als 20 Liter Benzin verbrauchen, sind unpraktisch.  
(Heibig 1990)

*doch* は、制限的關係文には現われず、非制限的（追叙的）關係文にのみ現われる。die 以下の關係詞節は、*doch* によって、「あなたも知っているでしょうけれど」というニュアンスを持つ。すなわち、「既に知っている」とことと関わりがある。この場合、すべての車が20 l のガソリンを消費するわけではない。(25 a) では「これらの大きな車」に限定されている。それに対し、(25 b) の Autos のような未定の未知のものを、「既に知っている」ものが規定することはできない。

このことは ja の場合にも当てはまる。

- (25)' a . Diese großen Autos, die *ja* mehr als 20 Liter Benzin verbrauchen, sind unpraktisch.  
b . Autos, die *ja* mehr als 20 Liter Benzin verbrauchen, sind unpraktisch.

ja も補助的な意味として「既に知っている」という性質を持っている<sup>13)</sup>。この(25)(25)'の a と b の差は心態詞の基本的機能によるのではなく、「既に知っている」という補助的な意味の特性によるものと言える<sup>14)</sup>。

## 5. ま と め

心態詞の意味を記述する際に、まず心態詞が義務的に使われているか、それとも任意的に用いられているものについては、すべての用法に共通する統一的・基本的な機能が求められる。また、基本的な機能だけでは不足する場合には、補助的な意味を適用する。

*doch* の基本的な機能は、話し手あるいは聞き手にとって、当然そうであると想定されるべき命題と、目の当たりにされる事実との「ずれ」 („nicht-übereinstimmbar“) を表わすものであり、これが、*doch* が現われることのできる文型と呼応する。また、補助的な意味として、既に知っていることに関わる機能があり、この意味が含まれる用例と含まれない用例がある。その他、義務的に用いられているものとして、願望文や認容文の例がある。

(26) DOCH als Abtönungspartikel

-obligatorisch

-fakultative      - nicht-übereinstimmbar

                         - nicht-übereinstimmbar, bekannt

このような用法を採ることによって、心態詞 *doch* の機能を、あまりに細かくなることもなく、また漠然とし過ぎることもなく、コンパクトに記述することができる。それから、他の心態詞との比較が容易になる、という利点があることを述べておきたい。

注

- 1) Modalpartikel とも言う。
- 2) Franck (1980) S. 172-193, Weydt/Hentschel (1983) S. 8f., Hentschel (1986) S. 123-149, Helbig (1990) S. 111-119.
- 3) Helbig (1990) S. 32-37
- 4) Franck (1980) S. 190-191.
- 5) Thurmair (1989) S. 24ff., S. 52f., Winkler (1992) S. 36.なお、  
(i) Daß er *doch* bald käme !  
のように、*daß* を用いた願望文の例もあるが、今日ではあまり使用されない。Oppenrieder (1989) S. 223.
- 6) Thurmair (1989) S. 57, Oppenrieder (1989) S. 202f., Winkler (1992) S. 36.
- 7) Thurmair (1989) S. 111.
- 8) Satzmodus という表現もされる。ここでは「文型」という語を用いることにする。
- 9) Abraham (1988)参照。また、Brandt/Reis/Rosengren/Zimmermann (1992)で、Abraham に対する反論がなされている。S. 73-77.
- 10) Borst (1985)参照。
- 11) Meibauer (1991) S. 228.
- 12) „unerwartet“という表現は、Thurmair (1989) S. 163-170による。
- 13) Thurmair (1989) S. 104-109, S. 200.
- 14) ドイツ語では、関係文の制限的用法と非制限的用法の文法的な区別はないが、関係節に *doch* などをいれることによって、非制限的用法であるとはっきりさせることができる。

## 参 考 文 献

- Abraham, Werner. 1988. Vorbemerkungen zur Modalpartikelsyntax im Deutschen. *Linguistische Berichte* 118. 443-465.
- Altman, Hans. 1987. Zur Problematik der Konstitution von Satzmodi als Formtypen. In: Meibauer, J. (Hrsg.). 1987. 22-56.
- Bastert, Ulrike. 1985. Modalpartikel und Lexikographie. Tübingen.
- Borst, Dieter. 1985. Die affirmativen Modalpartikeln doch, ja und schon. Ihre Bedeutung, Funktion, Stellung und ihr Vorkommen. Tübingen.
- Brandt, Margareta/Reis, Marga/Rosengren, Inger/Zimmermann, Ilse. 1992. Satzmodus und Illokution. In: Rosengren, I. (Hrsg.). 1992. 1-90.
- Franck, Dorothea. 1980. Grammatik und Konversation. Königstein/Ts.
- Helbig, Gerhard. 1990. Lexikon deutscher Partikeln. 2. unveränd. Aufl. Leipzig.
- Helbig, Gerhard/Buscha, Joachim. 1991. Deutsche Sprache. Ein Handbuch für den Ausländerunterricht. 13. Aufl. Leipzig.
- Hentschel, Elke. 1986. Funktion und Geschichte deutscher Partikeln. Tübingen.
- Heringer, Hans-Jürgen. 1988. Ja, ja, Partikeln! Können wir Partikelbedeutungen prototypisch erfassen? *Zeitschrift für Phonetik, Sprachwissenschaft und Kommunikationsforschung* 41. 730-754.
- Meibauer, Jörg (Hrsg.). 1987. Satzmodus zwischen Grammatik und Pragmatik. Tübingen.
- Meibauer, Jörg. 1991. Existenzimplikaturen bei rhetorischen w-Fragen. In Reis, M./Rosengren, I. (Hrsg.). 1991. 223-242.
- Oppenrieder, Willhelm. 1989. Selbständige Verb-letzt-Sätze: Ihr Platz im Satzmodussystem und ihre intonatorische Kennzeichnung. In: Altmann, H/Batliner, A/Oppenrieder, W (Hrsg.). *Zur Intonation von Modus und Fokus im Deutschen*. 1989. Tübingen.
- Reis, Marga/Rosengren, Inger (Hrsg.). 1991. *Fragesätze und Fragen*. Tübingen.
- Rosengren, Inger (Hrsg.). 1992. *Satz und Illokution*. Bd1. Tübingen.
- Thurmair, Maria. 1989. *Modalpartikeln und ihre Kombinationen*. Tübingen.
- Weydt, Harald (Hrsg.). 1983. *Partikeln und Interaktion*. Tübingen.
- Weydt, Harald/Hentschel, Elke. 1983. *Kleines Abtönungswörterbuch*. In: Weydt, H.

(Hrsg.). 1983. 3-24.

Winkler, Edeltraud. 1992. Modalpartikeln in selbständig verwendeten Verbendsätzen.  
Zeitschrift für Phonetik, Sprachwissenschaft und Kommunikationsforschung 45.  
30-48.

(大学院博士課程)